「自分の進路、見つけられた」

いま子どもたちは No.958

英語ディベート 下

「今日は夜行列車で来ました。帰りは夜行バスです」

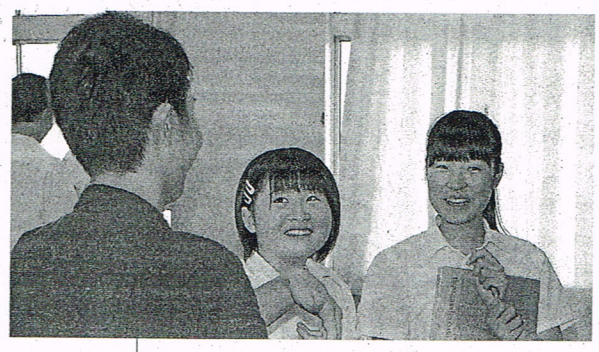
「えー、大変！」

8月初旬、茨城県立竹園高校の一室。英語ディベートの練習会が終わると、竹園ディベートチームの主将、小玉夏帆さん(16)たちは、対戦した滋賀県の近江兄弟社高校チームと、笑顔で話していた。

一つの論題について、賛否に分かれて丁々発止の議論を繰り広げる英語ディベート。その目的は、相手をやり込めることではない。論戦が終われば、生徒たちは握手を交わし、友情を育んでいく。

チームプレーが求められるのも、ディベートのだいご味だ。英語をりゅうちょうに話す生徒がたくさんいても、必ず勝てるわけではない。

トップバッターの立論を担当することが多い2年の上島理歩さん(16)は「ミスをしても、隣から『大丈夫』と声をかけてくれる。『絶対に勝つ』と気負わずに、みんなで協力してやるのが楽しい」と話す。



練習会を終え、他校の生徒と話す諸岡彩さん（中央）と小玉夏帆さん（右）＝茨城県つくば市

PKO、原発、輸入米関税、大学の秋入学、死刑廃止……。さまざまな論題を徹底的に調べた上で論じる作業は、生徒たちの進路選択にも刺激を与えている。

2年の諸岡彩さん(16)は、今年の論題「PKO」について調べているうちに、「日本の国際的な立場や国際関係をもっと知りたくなった」と話す。今は、外交官に興味を持っている。

「ディベートで論理的な考え方を鍛えてもらっている」という上島さんは、弁護士や検察官にあこがれている。

主将の小玉さんの夢は、医師になることと、留学することだ。

2年の高橋希実さん(17)は昨年、原発の是非を調べて論じたことがきっかけとなり、「どうすれば環境に優しいエネルギーを生み出せるか」を考えるようになった。大学では、環境系の学部で学ぶつもりだ。「自分の進路を見つけられたのも、ディベートのおかげです」

（伊東和貴）

◇

「英語ディベート」は終わり、次回は9月3日から始めます。